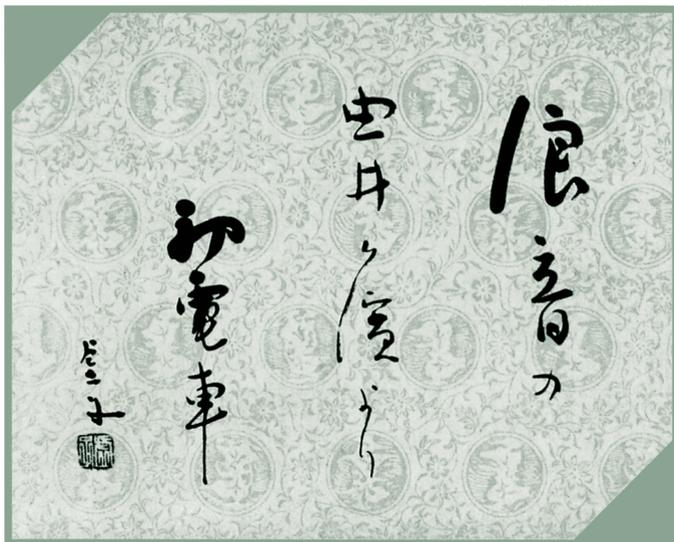


詠 詠 集 方

四 月 号



花鳥諷詠®

令和2年4月■第385号 ————— 目次



花鳥諷詠選集	稲畑 汀子	2
	岩岡 中正	4

第三十二回花鳥諷詠賞	7
------------------	---

第三十一回日本伝統俳句協会賞

受賞者のことば	8
選者評	9
選考経過報告	14

虚子研究 『六百五十句』 研究（4）	16
--------------------------	----

この人の作品	阿比留初見	21
--------------	-------------	----

一頁の鑑賞	石丸 雄介	22
	本郷 桂子	23

風報	24
----------	----

公告 令和二年度事業計画と予算書	25
------------------------	----

地区行事開催日程表	30
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

淋しさのやがて寒さとなりけり

福山早間 幸枝

白梅の一輪庭の黙を解く

伊賀北村 みち

寒牡丹咲かせ寡黙になりけり

箕面須知 香代子

ひと言を呑み込む別れ冬の月

福岡杉原 久美子

歩き出すまでの寒さと思ひけり

青森七戸 富美子

二句短評

一句目——どの様な事情であるのかは分からないが、作者の淋しさがやがて寒さを誘うのである。正月に集つて来て、大勢の家族で賑やかに過ごした人々が、徐々に戻って行って、遂に一人だけの暮らしになった作者なのかも知れない。その様な変化の中で、残された作者の淋しさが一句となった。如何にも心情の深い句である。二句目——何も咲かなかつた庭に白梅がたった一輪花を咲かせた。一輪だけであるのに、庭がまるで沈黙を解いたかのように思った作者の繊細な感性が素晴らしく感じのいい一句である。

入選六十句

かるた取闘志は負けてをらぬのに

町田 村井田貞子

輝きし処が水や枯蓮

鹿児島 平山 洋子

待たされてゐて苦にならぬ小春かな

加賀 西やすのり

マスク顔あなたは誰と問ひたくも

小千谷 大矢あきこ

雪あかり頼りに友を訪ねけり

函館 今井 星女

風は夜を淋しくしたりおでん酒

神戸 影山 里美

黄落の道見つければ歩きたく

東京 清水千鶴子

闇汁の会話も味の一つかな

高松 島谷うた子

村中の湯気立ちのぼる雪解水

大阪 上西左大信

編みあげしセーター手紙添へずとも

神戸 柏原 憲治

米寿なほ家守る暮し十二月

福山 佐藤 笹女

明るさの銀杏並木のつづく街

大分 古屋伸くに子

大病に打ち勝ちし年惜しみけり

尼崎 ほりもとちか

教皇を迎ふ広島聖樹の灯

福山 池上 幸子

葉先生の虚子句を説くやあたたかし

姫路 谷 春葉

健やかに老いて勤労感謝の日 宮城 山家登志子
 句縁とは断ちがたきもの冬芽吹く 熊本 坂本あかり
 山眠る裾に明治の家を守る 岩倉 村瀬みさを
 二週間まとめ書きして日記果つ 山口 椿 壽子
 藪巻の景の加はる庭となる 京都 山崎 貴子
 山下りて山の寒さを持ち歩く 奈良 水上 末子
 雪女郎雪の色して消えにけり 大牟田 石橋 武子
 落葉掃く音に始まる寺の朝 豊田 杉本 淑代
 サスペンス解けて湯ざめを覚えたる 名古屋 内藤 信子
 人の情しみじみ思ふ年の暮 稲城 園部 麻子
 学ぶこと楽し嬉しと初句会 神戸 岩水ひとみ
 柔らかに雲間洩れ来る冬日かな 白山 西 登美枝
 真つ新な心と句帳初句会 丸亀 片山 千鶴
 冬ざれの園に日差のゆきわたる 高松 岩瀬由美子
 新しき句帳を開き初句会 上越 藤井 敏子

初笑こそ親しさの中にゐて 福山 広川 良子
 短日や乗りし電車はすぐ発車 上越 板垣 柳子
 彼の人の年賀に心弾みたり 稲城 森本美紀子
 笹鳴の残してゆきし黙淋し 福岡 黒田 純子
 美しき時雨の光る枝の先 伊万里 田中 南嶽
 ザビエルの渡来の地なり冬椿 鹿児島 白石 白紘
 子に託す明るき未来毛糸編む 神戸 上岡あきら
 落葉して透かす櫛の空の青 久留米 後藤 隆
 大晦日十三人となりし家 うきは 大力 妙子
 俳諧の道終りなき老の春 浜田 小池ミサエ
 下萌えて母なる大地てふ言葉 知多 田辺 澄子
 雪吊を斯くも小さき植木にも 泉大津 多田羅紀子
 初暦掛けて未来の動き出す 山形 遠藤 良子
 飛ばぬままゆるゆる歩む冬の蜂 大阪 山内 繭彦
 めくり癖付きし厨の古暦 尾張旭 加藤美佐代

● 岩岡中正選

特選五句

客待ちの焼蕎麦売りのハーモニカ

福岡津田 富子

兄嫁の明るき声の初電話

金沢宮村 啓子

彼の手に触れしは山茶花の小径

八尾米澤 悦子

歩き出すまでの寒さと思ひけり

青森七戸 富美子

太陽に麦の芽青く走りけり

四国中央 豊田 みゆき

二句短評

一句目——最近はあまり見かけなくなつたが、かつてはリヤカーや自転車の焼蕎麦売りがいた。そこだけがあたたかそうで、そこに、手持ちぶさたの主人のハーモニカの音色。子らの声もして、昭和への郷愁の一句。俳句はこのように、季題を通して、人間や時代も詠める「詩」である。

二句目——お正月、帰省しないが故郷の実家へ新年の電話。もう父母はいないが、そこには兄と兄嫁がいて、今はこの一家が作者の故郷。人間は何かこうした絆によつて生きてゐるんだという真理にふれた、郷愁の漂う佳句。

みな同じ空を見てゐる冬木の芽	さぬき	原	道子
釣糸を垂れ大方は日向ぼこ	香川	三宅久美子	
忙しくただすぎゆきし三ヶ日	吹田	久留島信子	
もの取りに使はぬ部屋の寒さかな	朝来	枚田登志子	
極月の古本さらに五割引	堺	内田 陽子	
先生の快癒と春を待ちにけり	熊本	渡邊佳代子	
雨音の寒九の雨でありにけり	高知	和田 和子	
命日や笹鳴その日より庭に	倉吉	吉田やす子	
ひとりづつ増えてゆきたる日向ぼこ	高松	永森ケイ子	
寒月を背負ひて急ぐ家路かな	鳥原	中原 綾子	
初日の出みづほの大地動き出す	朝霞	鈴木 月惑	
また元の二人となりて松納め	高松	宇和川 厚	
おだやかな三ヶ日はや暮るるかな	備前	白石 昌弘	
何事ぞ交番からの初電話	うきは	金子 清黙	
丁寧に淹るる珈琲春隣	鳥原	三好 立夏	

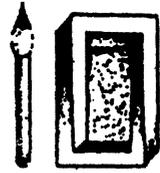
入選六十句

次々と人抜け小さくなる焚火 大牟田 介弘 紀子
魚屋の奥に鮫鰯吊られをり 西東京 石黒 和
古里の米に早速冬至粥 名古屋 斉藤 始子
手袋を脱ぎて始まる祈りかな 高知 森口乃里子
日記果つ心に残る一ページ 北海道 西澤カズ子
風は夜を淋しくしたりおでん酒 神戸 影山 里美
村中の湯気立ちのぼる雪解水 大阪 上西左大信
著ぶくれて句座の古参となつてをり 白山 大橋美代子
漢方にすがる一病冬籠 熊本 井芹真一郎
武蔵野の一隅に干す大根かな 日野 辻 梓測
大病に打ち勝ちし年惜しみけり 尼崎 ほりもとちか
余生なほ面白きかな返り花 下関 貞包 清子
退屈といふ日なかりし日記果つ 高松 織田 雅子
山眠る裾に明治の家を守る 岩倉 村瀬みさを
一塵もなき禅院の寒さかな 京都 森 孝子

水仙の香に振り向けば女学生 奈良 本谷真治郎
スケートの少女いつしか風となり 福岡 島原 仁代
百枚の田を一枚に今朝の雪 市原 飯塚 咲子
ビル街の地に還ることなき落葉 福岡 松尾 康乃
目瞑りてふくろふは置物と化す 羽曳野 羽測 幸子
寒紅を引き句心を整へる 松山 門田 智子
眉引きてよりあらたまる初鏡 福岡 西村 榮子
北大の都ぞ弥生てふ新酒 札幌 青木 秀夫
般若湯出て宿坊の年忘 吹田 河辺さち子
観音の御手の如くに仏手柑 鹿児島 青野 優子
梟の遅れて開く片目かな 今治 比留木のぶ子
人は影冬芽は光宿しけり 浜松 大庭よりえ
小さき傷指にふやして年つまる 北海道 伊藤ていこ
恵方より賑やかに子の一家かな 下関 中村 元代
夫知らぬ妻の一日日脚伸ぶ 福岡 阿部 弘子

退院のお祝ひですと寒卵 宇佐 加来 富子
 障子貼り替へたる部屋に母のなく 阿南 湯浅 美美
 働きて働きて母寝 正月 堺 山戸 暁子
 水音の雅楽のごとし山眠る 那珂川 池田ひさ絵
 大切に生きんと思ふお元日 札幌 岩本 京子
 小児科の星きらきらと聖樹かな 山形 荒井 朋枝
 みな同じ空を見てゐる冬木の芽 さぬき 原 道子
 釣糸を垂れ大方は日向ぼこ 香川 三宅久美子
 百歳のをみな心や初鏡 敦賀 為永香月枝
 血管の膨らんでゆく日向ぼこ 福岡 大石 靖子
 泣初の子を抱けばすぐ笑初 松江 三浦 純子
 ひとひらの花びらのごと賀状来る 大牟田 岩永美智子
 初場所や郷土力士の頼母しく 金沢 川口 俊子
 駅伝の子等に寒九の力水 神戸 涌羅 由美
 真向ひて初日遮るものなし 芦屋 笹尾清一路

友の皆眩しく見ゆる初句会 岡山 桜本 滋子
 日溜りは一つの世界初雀 宇佐 水野 公明
 色少し足して初夢語りけり 福岡 工藤 友子
 ゆつくりと墨すつてゐる二日かな 熊本 西村 孝子
 おだやかな三ヶ日はや暮るるかな 備前 白石 昌弘
 弓始ずばと師範の一番矢 名古屋 山口 勝行
 来し方をぼつりぼつりと鮫鯨鍋 福岡 山口 裕子
 愛誦の句を滑らす筆始 鹿児島 串間 麻衣
 あらたまの梢にかかる昼の月 東京 坂口 祐子
 長病みの夫にも意気地寒椿 大宰府 荒島由美子
 何事ぞ交番からの初電話 うきは 金子 清黙
 若かりし頃の春著を著てランチ 小樽 辺見 綾子
 縫初の小さき匂ひ袋かな 由布 立川さよ子
 震災の月日の地より霜の声 西宮 本郷 桂子
 新婚の書棚に飾る鏡餅 大分 福岡ただし



編集後記

波音の由比ヶ濱より初電車

大正十五年一月一日〜六日

虚子

令和二年度の第一号をお届けします。表紙の揮毫も虚子のこの句に代わりました。一年間おつきあいくださいませ。

●今月号より六月号まで、会費の振込票を添付しております。口座引落を申し込んでいらっしゃる方は、お振り込みをお願いします。口座引落の方は四月十三日引落予定です。

●一月二十五日(土)に開催した二〇一九年度第二回常務理事会および理事会にて承認された令和二年度の事業計画と予算案を今号にて報告致します。ご確認ください。

●今年度の第一回常務理事会・理事会は四月二十八日(火)に開催の予定ですが、「今般の新型コロナウィルス感染症に伴う影響のように、やむをえない事由により理事会等が開催できない場合、その状況が解消された後合理的な期間内に開催すれば行政庁としては斟酌して対応する」と内閣府より通達がなされました。理事会および六月に予定されている総会の日程も変更せざるを得ない事態になるかもしれません。社会情勢を鑑みながら遂行したいと存じます。皆様のご協力をお願い申し上げます。

●三月十三日をもって坊城俊樹事務局

長が退職いたしました。坊城は今後も常務理事として協会の活動に関わります。事務局は人員が削減された上、新型コロナウイルスの影響で時差通勤を奨励しております。一般業務及び電話対応などへの影響も少なからず発生すると存じますが、ご理解の程よろしく申し上げます。(須川)

花鳥諷詠四月号(通巻第三八五号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和二年四月一日

発行人 稲畑汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二-18-9

シャンブル笹塚二-B-10-1

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七-一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一-19-2